

葬式仏教は仏教にあらず ― 仏教界への挑戦状 ―

今また葬式仏教が問題になっています。IT 企業による葬儀社紹介サービス、寺院手配はすでに市民権を得てスマホ時代に浸透しつつある昨今です。僧侶手配サービスも活況を呈していく中、僧侶（導師）の評価制度の導入、いわゆる成績表によるランク付けも始まっているとのこと。加えて後払いお気持ちサービス。お布施の本来の主旨を考慮してお客様が喜捨したいと思うところを重視してのことのようです。こうした加速度的な変化の時代に葬式仏教、仏事サービス業はどこに向かっていくのでしょうか。

そもそもお葬式とは仏教なのでしょうか。お葬式は誰のものなのでしょうか。なぜひとはお葬式をするのでしょうか。お葬式は何のために行うのでしょうか。

今回はお葬式とは何かについて考えていきたいと思います。

先ず結論から申し上げますと私の個人的見解としては「お葬式」とは生活習慣です。「仏教」とは一人間哲学です。一宗教です。ですからお葬式は仏教ではないということもできます。しかし、お葬式は人の悲しみであり未知の世界の営みでありこれを仏教によって寄り添うことは否定できません。仏教の智慧と慈悲がお葬式という人の営みの中で果たす役割は充分にあると信じます。私が申し上げたいことはお葬式が仏教となってしまった日本仏教の現状を憂えましょうというのが私の主張です。

死とは残された人たちのものであって故人に死はないと思います。残された人たちがそれを糧に残された人生をどう生きていくかというだけのものであると信じます。人間界から天上界への一里塚と考えればそれは不幸とはいえ、むしろ本人にとっては人生の卒業式であって門出です。お葬式は個人の生きた証を労うためと遺族の再出発を誓うためのものなのでしょう。

お葬式は僧侶のものでもお寺のものでも仏教界のものでもありません。そこに仏教が僧侶が必ずしも関わる必然性はありません。はっきり言わせてもらえば関わろうが関わらなかりょうがどちらでもよいということです。ただそこに法力を備えた人天の導師としての僧侶を人々が欲すればそれはそれでよいというだけのことであってそれ以上でもそれ以下でもありません。

私が問題視しているのは「お葬式」と「お布施」という定義の難解な代物を隠れ蓑にして法外な料金の徴収をすることはもうやめましょう。これが果たして仏教なのでしょうかというものです。

お葬式は人の遺体の始末の仕方です。お坊さん（僧侶）とは宗教的生き方であって別物です。そこには何の因果関係もありません。かといって私は葬式仏教否定論者ではありません。葬式仏教によって形骸化した日本仏教の再生のためには現在の日本仏教のものの考え方、僧侶の在り方を根本的に見直す必要があると主張しているのです。釈尊の葬送観を示す根拠として次のような一節があります。「アーナンダよ。お前たちは修行完成者の遺骨の供養にかかずらうな、どうか、お前たちは、正しい目的のために努力せよ。正しい目的を実施せよ。正しい目的に向かって怠らず、勤め、専念しておれ。」と。※注1（『大般涅槃経』）

また親鸞聖人は「親鸞、閉眼せば、賀茂河にいれて魚に与うべし。（私が死んだら、賀茂川へ捨てて魚に与えよと。あるいは、「これすなわち、この肉身を軽んじて、仏法の信心を本とすべき由をあらわします故なり。これをもって思うに、いよいよ葬喪（そうそう）を一大事とすべきにあらず。もっとも停止すべし。（皆、肉体の葬式ばかりを考え、それを教えているのが仏教だと思っているが、そうではない。仏法の信心を最も重く見るのが仏教である。）と。※注2（『改邪鈔』）

わが宗門の開祖、道元禅師についても死者供養について否定をしているとまではいわないまでも少なくとも葬式仏教を肯定はしていません。釈尊に始まる仏教史の中で歴代仏祖や開祖で葬式仏教を推奨している人はいません。あくまでも葬式仏教は仏教の保守本流ではなく在家的なものです。仏法の王道をゆくものではありません。葬式仏教も仏教の範疇に入れてその枠組みの中で体系化できたとしてもそれはあくまでも在家仏教、世俗仏教として扱うべきであるというのが私の持論です。それを応用し援用して言うなら今の日本の僧侶のほとんどが在家僧侶であり世俗的僧侶です。

ですから今の日本の仏教である葬式仏教は在家仏教であって僧俗、僧と俗の中間的仏教です。

それを認めた上で再出発すべきなのが日本仏教です。葬式仏教は仏教にあら

ず、それでもそこから始め直す仏教もあっていいと思います。大乘非仏説の中で目覚ましい発展を遂げた大乘仏教のように日本仏教もこれから生まれ変わることはできます。

ここで一旦当初の前文に戻り、「お布施」の料金化と僧侶の評価制度について一考してみたいと思います。「お布施」とは料金化できるものなののでしょうか。仏教の常識からしたらそれは「否（ノー）」です。しかし、「お葬式」とは生活習慣であり、それを司る導師が世俗化した在家的僧侶であるなら料金体系とすることに何ら問題はありません。むしろ料金体系化して公開することは適切であり、その方が在家の人たちには喜ばれます。必ずしも純粋な宗教行為とは言えず、世俗活動としての一旦を荷うのであればサービス業であり、明瞭会計は歓迎すべきです。ある程度の相場が明確なことは両者にとって都合がよく判りやすいものです。司る導師にとって大切なことはそのお布施額以上のものを備えていること。それ以上の法施ができることです。それが出来ていれば堂々としてよいだけのことです。因みに当院では住職の執行と役僧の場合とではお布施の額に変動があります。額に幅をもたせて公開しているのはそのためでもあります。あとは規模や地域性、家庭事情等にも一定の考慮はしております。

布施は浄財であり、浄化した金銭を生きたお金として世の中に還元してゆくことは重要です。

そしていくら僧侶評価制度が出来たとて一喜一憂することはありません。動揺することはありません。僧侶とは生き方であり世俗の行為にかかざらうことはありません。ただ無心で仏と向かい合い、一期一会に真剣勝負が出来ていれば心配をすることは何もありません。それが出家というものです。達磨大師が梁朝の武帝であってもへつらうことなく世間に背を向けて生きたように私達もそうすべきです。仏法人が世間のことに右往左往をしてはいけません。因みに私は宗門や（檀）信徒からの評価もまったく気にしていません。何を言っていやがんだい程度です。ここに道元禅師と親鸞聖人のことばを引用し紹介して、「葬式仏教は仏教にあらず」というテーマの結論とさせていただきます。※注3

※注釈

注 1

大般涅槃經

『大般涅槃經』(だいはつねはんぎょう)は、釈迦の入滅(=大般涅槃(だいはつねはん))を叙述し、その意義を説く經典類の総称である。阿含經典類から大乘經典まで数種ある。略称『涅槃經』。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

注 2

改邪鈔(読み) かいじゃしょう

浄土真宗の書。一卷。覚如の撰。延元二年(一三三七)頃成立。宗内の邪説を二〇項目に分けて掲げたものであるが、法然、親鸞、如信とたどる三代伝持の血脈と、本願寺中心主義を打ち出した、覚如の代表著作。

出典 精選版 日本国語大辞典

注 3

達磨大師の禅思想

達磨大師は、中国北魏・梁代頃に、インドから来た渡来僧と伝えられ、お釈迦様から数えて28代目のお祖師さま、中国禅宗の初祖とされるお方で、円覚大師菩提達磨大和尚と称します。

「碧眼の胡僧(青い目の異国の僧)」とも表現されますが、伝記に関しては諸説ございます。禅宗の伝統的な見解では、梁の普通8年(527年)に南海より広州(広東省)に上陸し、梁の都、建康(南京)に来て、武帝(蕭衍)と問答を交わし、帝との機縁がかなわず北に渡り、嵩山少林寺に入って、面壁九年(九年間、壁に面して坐禅すること)されたことから、「壁觀婆羅門」と称されました。

なお、梁の武帝と達磨大師との間で交わされたとされる問答は以下の様に伝えられています。

如何なるか是れ聖諦第一義。(仏法の根本義は何でしょうか?)

磨云く、廓然無聖。(カラリとして、聖なるものなど何もない。)

帝云く、朕に対する者は誰ぞ。(一体、私の前にいるあなたは誰なのでしょう?)

磨云く、不識。(そんな事は知らない。)

このほか、武帝が即位して以来、寺を造立したり写経したり、僧を得度させること、記録としてこれ以上の者がいないほどであったが、一体どれほど多くの功德があるだろうか?とたずねた武帝に対し、「無功德(功德など無い)」と答えたともされます。

この問答は、「達磨廓然の話」として有名であります。經論の文字にとらわれず自己の本来の面目に徹することを目指す、達磨大師の禅思想をよく示しております。

出典: 曹洞宗 公式サイト・曹洞禅ネット
「達磨忌(だるまき) 10月5日」より